

「助けて！」と言えますか (抜粋)

さわやか福祉財団 堀田 力

日本人が幸せになるために必要なのに、もっとも不足しているものが、助け合いではなかろうか。アフリカや東南アジア、中南米の多くの国々と違って日本には食べる物も着るものも住む家も、まず、ある。今はほとんどの人が学校を出て、相応の知識もそなえている(省略)ほんの30~40年前から見ても夢のような豊かさである。(省略)

しかし、物質的な豊かさを手にするにつれ、日本人の心は貧しくなっていくように思われる。幼い子供の頃から、モノの豊かさを手に入れるために競争を強いられ、大人になると、どれだけ経済的レベルの高い生活をしているかを競い合う。乏しいモノを分かち合い、近所で助け合って生きる温かい人間性は、冷たい競争の精神に追い払われ、人々は、障がい児の施設が近所にくると地価が下がると言っていて、これを排斥するほど利己的になった。おそろしいのは、そのような競争社会で育った大人たちが助け合うことの温かさを理解できず、無意識にこれを拒み、否定することである。(省略)モノの豊かさを競う価値観が生み出す利己の世界は、自己より経済生活の低いレベルの人たちに対する蔑視と、自己よりそれが高い人たちに対する劣等感の世界である。常に上のレベルを求めてあくせく働き、自然や友人との語らいや、文化などを楽しむ心のゆとりがない。子供を受験戦争に駆り立て、その人間性を殺し、心を歪めてしまう。家族の中でも稼ぐ人、稼がない人で順位をつけるから自分が選んだ配偶者にすら心を開くことのない淋しい人生である。そして、時の運で経済的に落ち目となった時、人の助けを求めることができない。孤独と屈辱の中で身を縮めて生きている、精神的牢獄の日々を過ごすことになる。

これに対して、人々がごく当たり前に助けあう社会には、自分の生活の経済レベルがどうであろうと、安らぎがある。人々は、社会的、経済的レベルの如何にかかわらず、個性が認められ、それぞれの思いが大切にされる。人の思いを生かすため、自然に助けの手が差し込まれる。そこには、恩着せがましさは露ほどもなく、人に役立つ喜びと感情で表情は輝いている。出会えばいききと挨拶をし、すかさず、いいところを見つけて褒め、相手の心に生きることの充実感を湧きあがらせる。(省略)そういう近隣の人々と共に地域に住むことにより、人から認められ、受け入れられ、大切にされ生きることのかけがえのなさを実感し、将来にたいするゆったりとした安心感を得ることができる。

私はモノ豊かさが要らないと言っているのではない。せつかく大変な努力をしてつくりだしたモノの豊かさとあわせて昔から日本人がもっていた心の豊かさを存分に味わい、過去のどの時代よりも楽しい生き方をしたいと望むものである。(省略)